

# 発表題目：アприオリな正当化と推論—Thurrow による一般性議論の批判の検討を通じて

小倉翔（一橋大学）

Laurence Bonjour は「アприオリなもの」の存在に賛成する主要議論として「アприオリな正当化は認識論的に不可欠である」という趣旨のものを二種類提出している。このうちの一つは「アприオリな正当化は〈(i) 経験から (ii) 経験を越え出るような結論へ推論をすること (making inference)〉にとって不可欠である」という議論（第一議論）であり、もう一つはこれを一般化して「アприオリな正当化は推論をすることにとって不可欠である」ということを議論するもの（第二議論）である。

こうした議論は最初に提出されて以降、Albert Casullo, Gilbert Harman, James R. Beebe, Joshua C. Thurrow らによって扱われてきたが、いずれもオリジナル議論に対して批判的であって何らかの反論を展開している。このうち、Casullo は特にオリジナルの Bonjour の第一議論を「一般性議論 (The Generality Argument)」と呼んだ。その後 Casullo によって提出された一般性議論への反論に対し、Thurrow はその反論が的外れであることを議論したが、それでもオリジナルのままでは一般性議論は擁護し得ず、かくしていくつかの増補・訂正を施してはじめて一般性議論を擁護することができるとし、その新しいヴァージョンの一般性議論を独自に提案した。

本発表は主として Thurrow によって独自に一般性議論に対して加えられた反論を検討する（そして、そのついでにその他の主要な論者によって一般性議論に対して提供された批判にもできる限り応答することを試みる）ものである。最終的に主張されるのは「Thurrow の反論は正当化についての内在主義に関して Bonjour のそれよりも強いものを仮定しており、それゆえオリジナルの一般性議論への反論としては必ずしも適切でない」ということである。

本発表の展開は以下の通りである。

まず、Bonjour のオリジナルの議論に対する Thurrow の解釈を見ることになる。その解釈は Casullo の一般性議論解釈を訂正・増補したものであって、これは Thurrow によればより適切な解釈なのである。次に、このような解釈をもとに提出された Thurrow 独自の批判を見る。その批判の鍵となるのは〈推論原理を信じることを正当化されること〉と、〈推論をすることを正当化されること〉との区別である。以降はこうした Thurrow の批判が適切であるかどうかを検討することになる。最初に検討するのは「〈推論をすることを正当化されること〉とは一体どういうことなのか」ということ、および「〈推論原理を信じること

を正当化されること〉と〈推論をすることを正当化されること〉との区別（したがって **Thurow** の批判そのものもまた）そもそも意味をなすものなのかどうか」ということである。その後で検討するのは「仮に **Thurow** の批判が意味をなしたとすると、その批判は本当に **BonJour** の議論を切り崩すほどのものなのかどうか」ということである。こうした検討を通じて結論されるのは「たとえ **Thurow** の批判が意味をなしたとしても、その批判は少なくともそのままでは **BonJour** の議論に命中しない」ということである。